第 3 章

野宿経験のある生活保護受給者の人間関係

大阪市立大学文学部 学部生
橋本　真菜

3.1　はじめに

2008 年夏、野宿生活を経験した後生活保護を受けて居宅で生活している人々に対して聞き取りを行った。聞き取りができたのは若干名ではあったが、野宿経験のある生活保護受給者の現状をありありと示す印象的な言葉を多く聞くことができ、そこからわかったことが多くあった。私が着目したのは第一に野宿経験のある生活保護受給者が持つ人間関係の少なさである。また、第二に「生活保護受給者」としての自己否定の意識に注目した。以下の文章ではまず冒頭で野宿経験のある生活保護受給者にとっての人間関係の有り様を示す。その上で限られた人間関係しか持っていない現状を聞き取りから示し、その要因となっている人との接触の少なさ、社会参加の少なさの要因として、今回の聞き取りで見えてきた、生活保護制度の制度上の問題をあげる。また、後半「生活保護受給者」としての自己否定の意識についても言及する。

3.2　野宿経験のある生活保護受給者の人間関係

聞き取りからわかった人間関係の少なさを実例から示す前に、野宿経験のある生活保護受給者にとっての人間関係について触れておきたい。

野宿経験のある生活保護受給者にとって、人間関係の有無は単に生活に充実をもたらすといった問題ではなくもっと根本的な問題である。している野宿経験のある生活保護受給者のほとんどが単身で生活をしており、家族とは暮らしていない。野宿を経験する人の多くは野宿に至る過程で家族をはじめとした人間関係を失っているからである。生活に困窮し、NPO 釜ヶ崎支援機構の相談部門に 2003 年から 2008 年に相談にきた人たちのうち 1260 人中 731 人が家族と連絡を取っていない。これは有効記録の 89.4 %にあたる。

今回の聞き取りの中で多く聞かれたのが、もし自分が倒れたときにはしばらくの間発見されないかもしれない、という恐れの声であった。

> 一番心配なのは、自分が死んだ後 1 週間ぐらい発見されないなどという事態になる可能性があるのでは、と思うこと。新聞がたまれば誰かマンションの人が心配してくれるだろうけど、今のとこ自分を見かけなくなって（自分に何か起きて）心配してくれそうな人というのはいない。(事例 5)

倒れたときなど、自分で連絡できないときには諦めるしかない。諦める。発見されるのは何日かたってからだろうと思う。大家と交流はない。(事例 23)

一番心配なのは夜中などヘルパーがいないときに倒れた時だ。携帯を持っていないので助けを求められない。何かあったときのことが心配なので緊急電話か携帯を検討したいと思っている。(事例 10)

先述のように、生活保護受給者のほとんどが家族とは暮らさず単身である。野宿に至る過程で家族などの人間関係を失っているからである。普段から家族など継続的な人間関係を持っている人ならば、その人を見かけなくなれば周囲の人が声をかけるなど確認を取るだろう。しかしそれほどの深い人間関係を持たない人は、どこかで倒れていてもいなくなっても誰かが気づくということがない。何かあったときに、誰かすぐに頼れる人、気づいてくれる人がいるかいないかは、いざというときに直接的に助かるか死ぬかの問題につながるかもしれない。あるいはもし亡くなった後には発見されず放置されてしまうかもしれない。実際に自室で死亡した後、3 週間やそれ以上発見されない人がいるのが現状だ。野宿経験のある生活保護受給者にとっては、人間関係の少なさや希薄さがいざというとき助からないかもしれない「恐怖」、そして死んだ後見つけられないかもしれない「不安」をもたらす。

3.3 実際の人間関係

次に実際に野宿経験のある生活保護受給者が持つ人間関係の実態を聞き取りやデータから見ていきたい。

上で見たような人間関係を失った人たちは、野宿から脱し生活保護を受けた後も限られた人間関係しか持っていない。その現状は聞き取り対象者たちの言葉から知ることができた。

今回聞き取りをした生活保護受給者の中には、一日のほとんどの時間を一人で過ごす人が多かった。「暇な時間に何をしていますか」という問いに多くの人がテレビを見ていると答えた。一人で過ごす長い時間のつらさを語る人は多かった。

1 人で暮らしていると朝から晩までテレビを見ている。(事例 23)

「こんなところで一人で暮らしていたら気がくるう」と言う。「部屋が狭いからですか？」と尋ねるとそうではなく、一人で話し相手がいないことのせいだという。いらいらしてもそれをぶつける相手もいない。(事例 23)

聞き取り対象者が全く人間関係を持たない訳ではなく、何らかの社会資源を利用している人に限ればヘルパーや医者、NPO 関係者など人間関係は持っていた。社会資源を利用しない人には上記のような人間関係すら存在しない。挨拶をする程度の近所関係は持っているが、しかし友人などの個人的な人間関係や深い関係を持つ人は少なかった。その状況を示すケースを以下に示していきたい。

最近誕生日だったようで「お誕生日だったんですね、おめでとうございます」と言うと、恥ずかしそうにしながらも「誰も誕生日なんて覚えてないから祝ってくれない」と言っていた。(事例 23)

この聞き取りからは、誕生日を祝い合うようなプライベートな関係をこの男性が持っていないことがわかる。この男性は健康状態から一人での移動が難しく、ヘルパーに頼って生活をしていた。日常で会話を

する人間もヘルパーが多く、プライベートな人間関係はほとんど持っていなかった。

> 胃に潰瘍が 2 つあることがカメラ検査でわかった。（中略）今までずっとひとりでテレビしか相手のいない生活だったから、酒を飲み過ぎてしまったのだと思う。（事例 10）

この聞き取りの男性は派遣業で全国を転々として生活した経歴を持つ。釜ヶ崎に来たことを契機にそれまでの人間関係が切れてしまい、また釜ヶ崎経験も短いために友人をつくる機会がなかったという経緯がある。

> 時々、憂鬱な気分になったときには NPO スタッフの顔を見に行く。（事例 5）

この聞き取りの男性の言葉も、生活保護を受ける際に手続きを手伝った NPO スタッフ以外に、現在個人的な会話が出来る相手が居ないことを示している。

近所付き合いをしている人はほとんどいなかった。以下の言葉からわかる。

> 近所付き合いはほとんどない。エレベーターで会ったときに挨拶をして、「ごみ出しといたげるよー」と言われるぐらい。（事例 10）

> 自治会や町内会との関わりはなし。お知らせや案内が来ることもない。近所付き合いもなし。（事例 14）

今回の聞き取り対象者のほとんどが単身でアパート住まいであったがアパートの住人とも声をかわす程度で深い関係をつくっているという人は少なかった。地域によっては自治体や町内会が存在しているのかどうか定かでないところもあった。

通信手段として電話を持っていない人もいたが、電話を持っていても個人的に連絡をとる相手がいる人は少なく、企業やハローワークとの連絡等就職活動に利用する人やヘルパーとの時間確認のために利用する人など、主に受信専用として持つ人が多かった。

> 携帯電話を持っている。ヘルパーと買いに行った。かかってくるのはヘルパーからの時間変更の連絡ぐらいで、他からはかかってこないし、自分からかける人もいない。（事例 23）

聞き取りの中で、話し相手がいない現状を語る言葉があった。

> 約 2 時間の聞き取りを終えて帰る際、「こんなに人としゃべったのは 1 年ぶりぐらいだ」と言っていた。（事例 5）

この男性の聞き取りにかかったのはせいぜい 2 時間弱の時間であったので、その後に男性が発したこの言葉は非常に衝撃的であった。人間関係をもっていれば、これくらい会話をすることはあるだろう。二時間弱の長い時間をだれか他人と過ごすことがこの男性の日常にはないのであろう。上の言葉は野宿経験のある生活保護受給者がいかに個人的な人間関係を持っていないかを如実に表す言葉だった。

野宿生活者の多くは野宿にいたる過程で人間関係を失っているが、そのような人々が居宅保護になっても人間関係がないという状況はかわっていないのだ。

3.4　人との接触の少なさ（人間関係構築を阻むもの）

プライベートな関係がないことに上で言及したが、そもそも聞き取り対象者たちには人との接触が極端に少ない。また、社会参加の機会も極端に少ない。そのような状況では人間関係を新たに構築することは難しい。以下ではなぜ野宿経験のある生活保護受給者は人との接触や社会参加が少ないのかを見ていく。今回の調査で見えたその原因としてまず就労という社会参加を受給者から遠ざける現状があった。また、職に就いていても人間関係を作ることが困難である現状も聞き取りからわかった。以上 2 点を順に見ていく。まず、職が人間関係をもたらす例として、例外的に人との接触の多かった人の聞き取りから見ていきたい。

> 近所のおばあさんとも話す。そのおばあさんは 10 キロぐらい歩く人で 1 週間に 2 回ほどあう。「ちょっとボケている」人なので忘れたことは毎回聞いてくれる。「こちらとしてはたくさん話ができてありがたい（笑）」。マンションの隣の会社の人とも話す。暇な人が話しかけてくれるので気が晴れる。（事例 20）

上は生活保護を受けてから就職した男性の言葉である。この男性の場合職場に勤務する人間は彼一人だが、職場付近の人々と関係ができているため毎日会話をする人がおり、それが男性の楽しみとなっている。この男性の言葉から、就労という社会参加が人間関係をつくる貴重な機会のひとつとなっていることがわかる。逆に職に就かないことは人間関係を構築できる可能性のある場を一つ失うことになると言えるだろう。現在の社会では職が社会参加や人間関係形成につながる大きな機会のひとつとなっている。職に就いているかいないかはその人の行動範囲や人間関係の形成に大きく関わる問題であり、職に就いていればある程度人との接触があり、そこから人間関係も生まれる。しかし実際には野宿経験後の生活保護受給者の多くは職という社会参加をしていない。なぜ野宿経験後の生活保護受給者は職についていないのか。野宿経験後の生活保護受給者を職という社会参加から遠ざける要因は何なのか。社会参加と人間関係形成につながる機会は職以外のにも現在の社会には多くあるが、ここでは特に職について見ていく。

まず、野宿経験のある生活保護受給者の多くが高齢であり、現在の経済システムの中で職に就くのは難しいことが聞き取りからも分かった。以下はそれを示す、生活保護受給後も就職活動を続ける 60 代前半の男性の言葉である。

> ドヤ生活だったときは就職活動の際、宿泊しているドヤの住所と電話番号を使っていた。だから仕事が見つからないのだと思っていた。生活保護を受けてから住所も電話も手に入れて、仕事に就けるのかと思ったが、なぜなのかやはり仕事は見つからない。（事例 5）

この男性は住所がないことを職に就けない大きな理由と思っていたようだが、住所を持った後も職に就くことは難しかった。現代の日本社会では 60 歳をこえる男性を職から排除する現実がある。

就職が難しいだけではなく、そもそも生活保護制度の仕組みが理由で受給者が就職をためらう現実もある。

> 働いて収入が入っても保護費が減らされるので、仕事に行くだけで出費がかさむのは大変だ。（事例 5）

生活保護制度の中では就職して稼いでも、それが直接そのまま自分の収入増になることはない。規定された最低生活費の金額を超える収入分は保護費から同金額程度減らされ、結局自分の手元にはいる生活費は無職時とあまり変わらない。しかし、職に就き生活の行動範囲が広がると当然のこと出費は増す。結局働くと生活が苦しくなるという現状がある。就職後、出費が増えるという現実が以下のような聞き取りからわかった。

> 交通費は 1 万円までででるので定期代にはなるが、最初から支給されるわけではないから、最初は自分で立て替えないといけない。(事例 5)

> 生保の支給日である 1 日からでないと働けない。交通費や食費のことを考えると月末には余裕がない。(事例 5)

以上から生活保護受給者が職に就くと、交通費や外出先での食費など職に関わる出費から経済的に苦しくなるという状況がわかる。就職して行動範囲が広がることで、経済的に苦しくなるというサイクルは生活保護受給者を就職自体から遠ざけている。以上のような「職につけない」現状が生活保護受給者を職という社会参加から遠ざけ、人との接触をなくしている。

また、職に就き、社会参加をしている場合にも必ずしも人間関係ができるというわけではない。生活保護受給者が職場で人間関係を作りにくい現状がある。その原因となっているのは人間関係をつくるために必要な交際費、出費の問題である。下に聞き取りを示した男性は就職活動の末、職を得た。そのときの話を聞くうちに出てきた言葉である。

> 働き始めて少しすると会社で急に葬式があったときに必要だなと背広を買った。1 万 5 千円で、結構な出費だった。(事例 5)

月 11 万円から 12 万円ほどの生活保護費のなかで、家賃や光熱費などを引いた中でのやりくりは厳しい。そのなかでのスーツ代の出費は厳しい。

> 仕事中、外の現場に行くときなどは会社の人とご飯を食べる流れになる。店に入ると一食 1,000 円ほどもして食費がばかにならない。自分だけほかのところに行くわけにも行かないし困ってしまう。仕方がないので、外に行かないときの昼ご飯はパンなどを買って近くの公園で食べて、休憩時間が終わったら会社に戻る。雨の日などは仕方がないから会社で食べていた。(事例 5)

聞き取りをした中で多くの人が食費に気をつけてやりくりをしていた。例えば安いスーパーを探したり、セール時間にスーパーの総菜を買いに行ったりするなど自らの工夫を語る人は多かった。そんななかで一食 1,000 円の出費は大きいに違いない。しかし人間関係をつくる中で職場の同僚や上司と食事をすることは非常に大切だろう。この男性の場合、普段の勤務のときには職場の人間からはなれて食事をとっている。粗末な食事を知られたくないためか、そもそも周りの人間と関係を作りたくないのか、それは定かではないが、職場に勤めているだけで人間関係ができるとは限らず、それを阻む要素があることを示している。その一つは確実に交際費に多くのお金をさけないことにあるだろう。上では職についている人について見たが、職についているかいないに関わらず、交際費に多くの金をさけないことが人間関係をつくることを阻んでいる現実は多くの生活保護受給者に共通した事実であろう。

3.5 「生活保護受給者である」という劣等感

人間関係の少なさ以外に私が着目したのは自らが生活保護受給者であるという事実から来る自己否定の意識である。聞き取りをする中で、生活保護を受けている自分は一般の人間とは違う人間であり、積極的に何かを要求したり、社会に働きかけたりすることはできないという意識が感じられた。

聞き取りをする中で多くの人が以下のような言葉を繰り返した。

> 「人のお金で生活しているということは覚えている。」(事例 23)
>
> 「国の税金で助けてもらっていることは感じているし、若い人の負担になっていることは忘れていない。」(事例 10)
>
> 「自分はみなさんのお金で生活をしているのだから、ありがたい。生活に関して不満はない。」(事例 20)
>
> 「何回も言うが、不満はない。不満を言ったら罰があたると思う。不満を言う人の顔が見たい。」(事例 20)

このような発言から「自分は何かを要求できる立場ではない」「生かしてもらってるのだから文句を言ってはいけない」というような引け目、負い目を感じている生活保護受給者の現状を見た。受給者は何か要求をするということがなかった。もう少しでも生活保護の受給費が多ければゆとりのある生活は保障されるかもしれない。しかし「何か要求することはありませんか」とこちらが質問した際には上のように「何も望むことはない」と強く受給者は言い放つばかりであった。それどころかこちらが質問するまでもなく、開口一番「不平不満はない」と強調する人もいた。なぜ、生活保護受給者はそのような言葉を繰り返すのだろうか。手がかりとなりそうな言葉を聞き取りから挙げて見ていく。

> 「ホームレス」をしていたときのことを思えば今は天国だ。(事例 20)

上は部屋の暖房に話が及んだとき受給者が口にした言葉だ。雨露をしのぐ場所にも苦労した過酷な野宿時代の経験を思えば、今の苦労とは比べ物にならないのかもしれない。

> 「国の税金で助けてもらっていることは感じているし、若い人の負担になっていることは忘れていない。」(事例 10)

上のように聞き取りをしている私たち学生を意識した発言もあった。社会が生活保護受給者に貼付けている「他人の金で生活する人間」というレッテルや、そこに内包されている「自分で稼かず人の金で生活する人間は社会のお荷物である」という意識を内面化しての言葉かもしれない。しかし野宿にいたるまでの経緯を見れば、すべてが本人たちの責任とは決して言えず、職を保障できず、職を失った彼らに衣食住を保障できずに野宿に至らせた責任は社会の側にある。

生活保護受給者の自己否定の言葉は、時に聞いているこちらの言葉を失わせた。

> 高齢化社会では医療費がかさむ。早くお迎えが来てくれればいいと自分も思っている。年間お金を 200 万円もらっている。長生きしても仕方がない。長生きは日本国民にとってよくないと思う。(事

例 20）

この男性は職についていて、充実した生活を送っている人のように見えた。しかし「自分は社会のお荷物である」「お荷物になる人間は死んだ方がいい」という意識が上の言葉から見て取れた。

このような自己否定の意識は、昨今の日本社会が生活保護受給者に対して向けている「社会のお荷物」という意識を、受給者自身が内面化することで生まれている。生活保護受給者は自己否定の意識から、「社会の邪魔」にならず生きていこうとしている。

3.6　終わりに

野宿生活を経験した生活保護受給者は限られた人間関係しか持たない人が多い。それには職につく機会がないことや交際費にさける収入が限られていることなどの制度的な要因が大きく絡んでいる。また、強い自己否定の意識を持ち、社会の邪魔にならずに生きていこうとしている人が多い。